

いざ羽衣石城・南条の元へ

鳥取城落城の直後10月26日のこと

【信長公記】

「十月廿六日、伯耆国に南条勤兵衛、小鴨左衛門尉、兄弟兩人為御身方居城候處、吉川罷出南條表取巻之由注進候。眼前に攻殺させ候てハ、都鄙之口難無念之由候て、羽柴筑前守、後巻罷立、東西之膚ヲ合、可及一戦行にて」

「10月26日、伯耆国に南条元統と小鴨元清の兄弟が、織田の味方として居城している。そこに吉川元春自らが攻めに来た。まさに救援に行かずして、これを織田方として見殺しにしては、都や田舎の人々から非難される。羽柴秀吉後巻としていで立ち、織田軍が毛利軍の領国・伯耆に入り東（織田）と西（毛利）が膚を合せて一戦交える。」

【信長公記】

織田信長の経歴の正確な実録を目指した軍記。永禄11年（1568）の信長上洛から天正10年（1582）の本能寺の変までを記す。著者は信長に仕えた太田牛一。

【羽柴秀吉】

のちに三英傑の一人・豊臣秀吉となる。農民身分から織田信長のもとで戦功を立て、大名へと出世した折に木下姓を羽柴姓に改めた。本能寺で急死した織田信長の跡を継いで天下を統一し、近世封建社会の基礎を築いた。（初代）武家閥白、太閤とも呼ばれる。

【吉川元春】

毛利元就の次男。初陣から76戦無敗の伝説をもつ。吉川家の養子に入り、弟の小早川隆景と共に、本家長男の毛利隆元とその息子・輝元を支えた。主に山陰地方を拠点に活躍し、毛利家を西日本最大の大名に押し上げることに貢献した。

十万寺城跡への行き方

JR松崎駅から十万寺集落まで車で約15分
十万寺集落から登山道を徒歩約40分

元春と秀吉の対陣

伯耆国羽衣石城を拠点とする国人領主の南条氏は、戦国時代には毛利氏と手を結び、出雲の尼子氏滅亡後は、伯耆三郡を支配する毛利氏山陰支配の一翼を担う存在であった。

天正3年（1575）、当主の南条宗勝が病死して元統が跡を継ぐと、織田信長による調略が開始された。元統は同7年に毛利方の家臣を討伐し、織田方への寝返りを鮮明にした。南条氏を味方に引き入れた翌年、織田信長家臣の羽柴秀吉は因幡へ侵攻した。

天正9年（1581）6月、秀吉は2万余りの兵を率いて第2次鳥取城攻めを開始し、城兵への兵糧攻めに成功する。毛利方の吉川元春は、鳥取城救援のため月山富田城から兵を東へ進めた。吉川勢はまず南条氏の羽衣石城攻略を目指し、10月25日には馬ノ山に陣を布く。そしてさらに前進しようとしていたところに、鳥取城落城と吉川経家自刃の知らせが届くことになる。

その頃、秀吉は姫路へ帰陣の準備を整えていた。そこに南条元統とその弟・小鴨元清から助勢要請が届く。それは吉川元春が、羽衣石城攻撃の準備をしているという内容であった。

秀吉は10月27日、高山に着陣し馬ノ山の吉川元春と対峙したと、江戸時代の地誌類に書かれている。秀吉軍数万に対し、吉川勢はわずか千だったとされるが、鳥取城で散った吉川経家の吊い合戦に望むべく、その戦意は高かった。秀吉は犠牲を考慮して決戦を避け、羽衣石城に食料と弾薬を補給することにした。峰伝いに輸送を開始する秀吉軍に対し、吉川勢は松崎付近まで出撃し妨害を加えたという。

無事に物資を補給した秀吉は陣を引き払い、元春も主力を率いて月山富田城へ帰陣した。両軍は互いの実力を認め合った上で、衝突することなく撤退したのである。

南条氏救援～唯一無二の陣城～

十万寺城

じゅうまんじじょう



お問合せ

湯梨浜町教育委員会

〒682-0723鳥取県東伯郡湯梨浜町久留19-1
湯梨浜町教育委員会事務局生涯学習・人権推進課
TEL 0858-35-5367 FAX 0858-35-5387
MAIL yshogai@yurihama.jp

十万寺城の構造

羽衣石城の南方、直線距離にして約850m離れた山頂部を中心に築かれた城で、羽衣石城との間に大きな谷地形が横たわり、両者を隔ている。

主郭は東西70m×南北50mの規模で、内部は未造成だが、南側を除く羽衣石城側の三方に明瞭に土塁が残されている。南側も一段高く通路状となり、西側曲輪群へと接続するため、土塁としての役割も兼ねていたと考えられる。また、北側に設けられた土塁の東西端部はやや広がっているため、物見櫓等があったことも想定される。

土塁以外の明瞭な遺構は、主郭を区切る堀切と空堀だ。東と北西に巨大な堀切を設け、その間も空堀状を呈し、北側の防備を固めている。東側に突出する曲輪との間には堀切を設けて切断し、西側へと続く曲輪の両側には豎堀が見られる。

十万寺城の役割

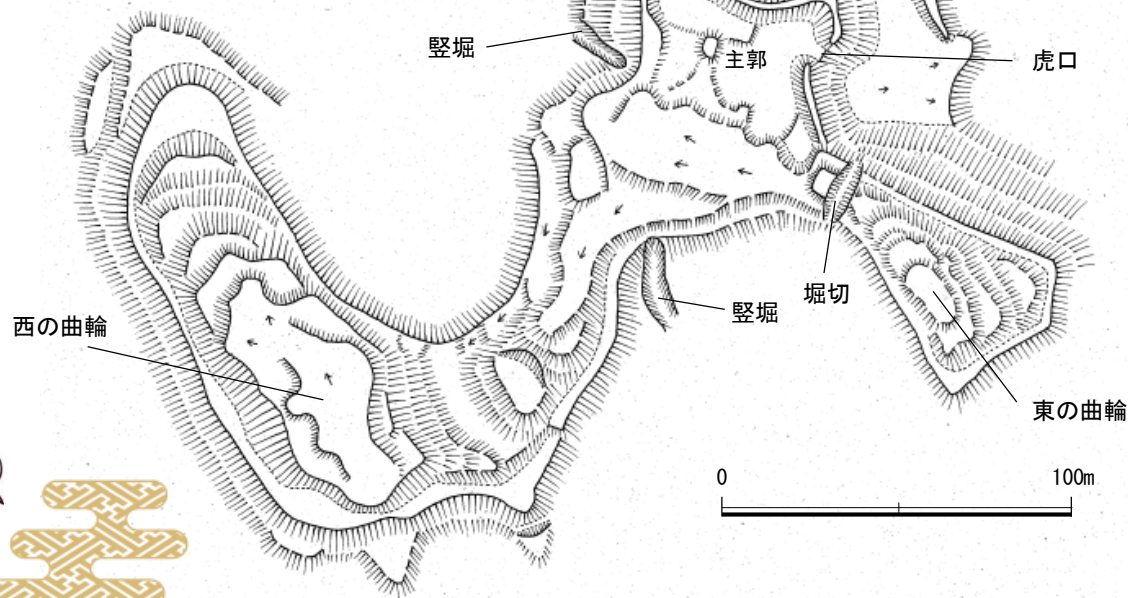
吉川勢に囲まれた南条元統らの助勢要求に応え、秀吉は数万の兵を率い着陣、羽衣石城に食料と弾薬を補給した。この時、秀吉が入る本陣であり、かつ羽衣石城へと搬入する食糧と弾薬保管施設として築かれたのが十万寺城だと想定される。眼下に羽衣石城を見下ろすだけでなく、さらにその先の吉川本陣の馬ノ山までも見通すことができることから、本陣だった可能性が高い。

土塁囲みの曲輪が本陣兼物資保管場所で、その他が兵の駐屯地として利用されたと思われる。

秀吉が羽衣石城に入らず新たな陣城を築いた理由は、羽衣石城が階段状に曲輪を配置しただけの単純な構造で防禦力が弱いため、攻撃された場合のリスクが高いと判断したものと考えられる。

十万寺城縄張り図

～城郭遺構～



ゆり可ん

唯一無二の陣城

織豊政権の陣城としては、小谷城攻め、三木城攻め、鳥取城攻め、小田原城攻めなどの際に築かれたものが、良好な形で多く残されている。これらの陣城は、すべて城を攻めるために築かれたものである。しかし十万寺城は、城攻めではなく羽衣石城の南条氏を救援するために築かれた城とみられる。救援のために築かれた陣城の遺構は、国内唯一といっても過言ではない。

赤色立体地図

